

演題番号：A7

## 流行性出血熱ウイルス血清型7によるイバラキ病様疾病の発生と疫学調査

○中条正樹，名部美琴，寺一未奈子，大野恭平，梶河紗代，中山卓也

兵庫県姫路家畜保健衛生所

1. はじめに：流行性出血病ウイルス血清型7 (EHDV-7)は、1997年に国内で発生した約1,000頭の流死産・嚥下障害の原因となったウイルスで、イバラキウイルス (EHDV-2)と類似の急性熱性疾患を引き起こすことが知られている。2019年、嚥下障害を呈する牛の病性鑑定を行い、EHDV-7によるイバラキ病様疾病と診断したことから、流行状況を把握するため疫学調査を実施した。

2. 材料および：方法症例1は黒毛和種(2016年生、繁殖用雌牛)、2019年10月13日嚥下障害を発症、16日死産した後に死亡。症例2は黒毛和種(2004年生、繁殖用雌牛)、11月6日から多量の流涎、8日嚥下障害となり、14日に死亡したため病理解剖を実施。その結果、喉頭粘膜の水腫性肥厚、食道の弛緩・褪色、肺炎などが見られ、病理組織検査では食道筋肉の硝子様変性・壊死などが見られた。2症例の発症牛の血液からPCRでEHDV-7遺伝子が検出され、中和抗体陽性であったことからEHDV-7によるイバラキ病様疾病と診断した。さらに疫学調査として、各症例の同居牛及び令和元年度発生予察調査おとり牛(県内18市町29戸65頭)の血液を用いて、EHDV-7の抗体検査とPCR検査を実施するとともに、発症牛

から検出されたEHDV-7遺伝子の系統樹解析を行った。

3. 結果：症例1(阪神北)では11月下旬に同居牛約100頭中14頭採血、11頭が抗体陽性(78.6%)。症例2(北播磨)では11月下旬、同居牛約50頭中13頭採血、1頭が抗体陽性(7.7%)。県内の流行状況は、9月に丹波と阪神北で3戸3頭、11月に同地域の3戸7頭で抗体または遺伝子を検出。また、発症牛由来の2株はVP2領域(326塩基)で100%一致、VP3領域の系統樹解析では2016年の県内の無症状牛由来株や2013年の中国分離株などと近縁であった。

4. 考察および結語：県内では2019年9月までに少なくとも丹波、阪神北に侵入し、10～11月に阪神北・北播磨で発症例が確認された。発症は2症例のみであり、多くは不顕性感染と考えられた。分娩に伴う体力・免疫力の低下や、他の疾病にすでに罹患している牛では症状が強く現れると推察された。今回の株は過去に国内やアジアなど熱帯・亜熱帯地域で検出された株と近縁であり、アジア近隣諸国からたびたび国内に侵入していると考えられた。